

特別対談：渡辺美術印刷(株) × アキヤマインターナショナル(株)

テーマ「印刷会社生き残りのための施策」

小ロット、短納期、そして単価の下落。印刷業界を取り巻く環境は、まだまだ厳しい。景気回復基調にある現在、仕事の数自体は増えたものの、なかなか業績が上がらないという声も聞こえてくる。この10年で、印刷業は大きく変わり、次の10年を見据えた時、いま何をすべきか。今回、渡辺美術印刷(株)の関根薫社長、関根三郎工場長を迎え、会社の展望や設備投資による可能性についてのお話を伺いました。

企業の方向性を決める選択

— 渡辺美術印刷さんは、ここ5年くらいで、菊全判4/4色両面機「Jprint4p440」を2台も入れていますね。まず、このあたりの経緯についてお聞かせください。

社長：最初の「Jprint4p440」を導入したのが2002年。ちょうど1991年に導入した印刷機の支払いも終わって、利益も出ていた頃で、今後の方向性を模索していた時期でもあります。というのは、当社は大手からの仕事が9割を占めているのですが、すでに印刷単価の下落が始まっていました。いままで通りのやり方ではジリ貧になってしまうのは明らかです。10年先を見て次の一手を打つか、もしくは利益のある間に印刷業をやめてしまうか。その頃ですよ、葛西さんがいらっしたの。

葛西：初めて両面機を入れるということで、大きな決断が必要だったと思います。実はこちらへは、ある方のご紹介でお伺いさせていただきました。その方が言うには「渡辺美術印刷の発展には両面機が欠かせない」と。事実、私たちも何度か訪問するうちに、非常に技術力の高い会社だとわかり、当社の両面機を活かしてもらえらる会社だと確信しました。

—しかし、初めてのアキヤマ機、しかも初めての両面機ですから、不安も大きかったのでは？

工場長：既存のメーカーの機械なら共通の部品もあります。メーカーを変えるということは、操作方法からスイッチの位置まで、印刷機のインターフェースがまるで違うわけです。

工場長：当社は写真集など印刷要求度の高いものが多いですから、果たして両面機で大丈夫か、という思いはありました。実際の刷り本を見せていただいて、ホッとしましたね。やれそうだと。でも最初は本当に大変でした。タッチパネルもコンピュータ制御で、今までの印刷機に比べ、高度に進化している。ローラーも操作方法も全部違う。良いものができるのはわかっているのですが、それを自分の手に落とし込むまで納得できないわけです。3ヵ月くらいは、寝食忘れて機械に貼り付いていましたね。

社長：確かにその頃の工場長は、げっそりしていました。でも楽しそうだったよね(笑)。Jprintは、今まで私たちが扱ってきた機械と違って非常に革新的。ある意味、じゃじゃ馬のような機械で、上手く乗りこなせば最高の品質を与えてくれるんです。

工場長：刺激的な機械というか、アキヤマの印刷機はどこまでできるのか挑戦したくなる。

葛西：あのブランケットが良い、このローラーが向いているなど、工場長はいろいろとチャレンジしてくれるんです。こうしたデータが、より良い機械づくりにつながっています。

社長：品質の面だけでなく、薄紙から高級印刷まで汎用性が高く、生産効率も良い。業績に大きく貢献してくれています。

葛西：渡辺美術印刷さんは2002年に1台、2005年にも同型機を入れていただいて、さらに5/5色両面機「Jprint5p540」の導入も決定しました。5年で3台も入れていただけるとは思っていなかったの、私たちとしてもうれしい限りです。

—両面5色機ということは、特色の仕事も増えてきたのですか。

社長：従来の仕事は両面4色機2台で充分です。両面5色機を持つことで、雑誌や書籍など、表紙から本文まで一冊すべて受け入れられる体制を整えたということです。それに最近では、両面4色機が珍しくなくなっているので、新しい武器を持つ意味もあります。

葛西：表紙は特色を使うケースが多いですからね。表紙も本文も一社でまかなえれば、大きな付加価値になります。

設備投資はモチベーションアップの起爆剤

— 渡辺美術印刷さんではJprintだけでなく、CTPも導入されました。またショールームを造られたりと、設備に関しては積極的に投資されていますね。

社長：結局、投資というのは自分たちが描くビジョンに向かって進むための手段なのです。私たちが言えば、高品質で価値のある印刷物を作ること。そのために「必要なところには投資する」という考えです。また設備というのは、社員に希望を与えることができます。2002年にJprintを導入した際、社内に活気があふれ出したんですね。そのとき初めて、設備というのはスタッフのモチベーションを高めることができるのだなと気づきました。

葛西：印刷業界を生き残るだけでなく、渡辺美術印刷さんでは若い方がイキイキと働くことを楽しんでいる。それに今年ISO14001取得にも取り組まれていて、スタッフの方も自分の会社を誇りに思っているのでは。

社長：環境対応はこれからのキーポイント。これまでは小さな会社はあまり社会的責任について問われなかったのですが、今では当たり前で考えないといけないことのひとつですから。当社ではクリオネマークを取得していますし、数年前からノンVOCにも取り組んでいます。Jprintにはろ過装置も付けました。

葛西：環境の対策はもちろん、その他の機能についても、お客様のご要望にいかに対応するかを私たちは命題にしています。印刷会社によって、必要とする機能は違いますよね。オーダーメイドに近い感覚で、本当に必要な機能をお客様と一緒に創っていく。それが当社の強みだと思っています。

渡辺美術印刷株式会社
所在地/埼玉県さいたま市桜区南元宿2-24-6
設立/昭和25年
代表取締役 関根 薫
TEL/048-853-7733(代) FAX/048-853-7735
http://www.watanabe-art.jp/



渡辺美術印刷株式会社
関根薫 社長(本文の記載、社長)

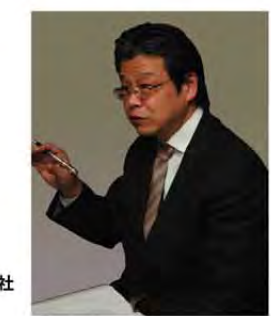
社長：決め手になったのは、やはりユーザー訪問ですね。葛西さんは信用できる人ですけど、やっぱり営業マンですから(笑)。実際に稼働している機械が刷ったものを見なければ、判断は下せません。



渡辺美術印刷株式会社
関根三郎 工場長(本文の記載、工場長)



アキヤマインターナショナル株式会社
営業本部長 葛西剛陽(本文の記載、葛西)



インタビュー
株式会社日本印刷新聞社
河内英成 記者